

水稲栽培こよみ

肥料・農薬・資材はJAで

4. 水稲施肥基準(例)(10a当り) “品質・食味の向上は土づくりから”

肥料	10a当り:施肥量kg(袋数)	施肥時期
肥土	珪力燐(粒) 200kg(10袋)	9月~2月
標準基肥	農力アップ(粒) 100kg(5袋)	9月~2月
登熟向上	ソルサブリエキス 約5kg(4L)	中干し後の最初の取水時
穂肥	けい酸加里プレミア34(粒) 30~40kg(1.5~2袋)	出穂35~40日前
肥	マルチサポート1号 20~40kg(1~2袋)	出穂40日前
基肥	NK化成4号 第1回 20kg	コシヒカリ 出穂18日前 その他品種 出穂20日前
一発	グッド18045 20~30kg	コシヒカリ 出穂20日前 その他品種 出穂23日前
発	コシヒカリ セラコート R845 40kg	代かき直前
	コシヒカリ セラコート RS822 40kg	
	コシヒカリ けい酸加里入セラコート R860 40kg	
	コシヒカリ・キヌヒカリ 軽量らくだ君(15kg袋) 25~30kg キヌヒカリ 35~40kg	※この肥料は、基肥施用のみで、 穂肥施用は基本的に不要です。
	あきたこまち セラコート R592 35~40kg	「軽量らくだ君」を使用される 場合は、味アップM(粒)等の 施肥が重要です。
	キヌヒカリ Jコート022 40~50kg	「スマイルロング」は、天候・生育 状況により、追肥が必要な場合が ございます。
	みえのゆめ エムコート489 50kg	
	あきたこまち・コシヒカリ スマイルロング 45~55kg	

※側条施肥田植機の場合、基肥の施肥量を20~30%減らして下さい。
 ※穂肥は出穂直前の施肥や出穂後の実肥はタンパク含量を高め、食味を著しく損ないますので施肥しないで下さい。
 ※この施肥設計を参考にして、各自水田の土壌条件・慣行施肥・稲の生育等を十分検討の上、天候を考慮して施肥して下さい。
 ※転作(大豆、小麦等)跡圃場については、基肥窒素の施肥量を30~50%減らして下さい。

農薬は使用法・安全使用基準を必ず守り、周辺に飛散しないように使用しましょう。

種子は毎年全量更新しましょう。
栽培履歴を記載し「食の安全・安心」を守りましょう。

目標	良い苗を作る	早く分けつさせる	無効分けつ防止	良い穂を作る	実りをよくする	土づくり						
苗の育成過程	(稚苗栽培) 播種	田植	田植後一週間	中干し開始	出穂35日前 (幼穂約10%) 出穂20日前 (幼穂約10%) 出穂18日前 (幼穂約10%) 穂ばらみ期 出穂7日前	出穂期 落穂期 成熟期						
主要品種別生育月日の参考目安	あきたこまち	3/20	4/10	4/17	5/19	5/26	6/10	6/21	7/2	7/7	8/1	8/8
田植が5日前後すると出穂、成熟期はおおむね2日差がでる	コシヒカリ(早)	3/25	4/15	4/22	5/28	6/4	6/21	7/2	7/12	7/17	8/8	8/16
	コシヒカリ(遅)	4/10	4/30	5/7	6/6	6/13	6/30	7/11	7/21	7/26	8/16	8/23
	キヌヒカリ	4/15	5/5	5/12	6/8	6/16	7/1	7/14	7/24	7/29	8/21	8/28
作業メモ	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()	()
水管理	※健苗育成 育苗時に水をやりすぎない	田植直後は深水で、植いたみ防止	5cm	3cm	5cm	3cm	浅水で活着をよくし分けつ促進	間断かん水で根の健全化をはかる	浅水かん水			
主な作業とその要点	播種 土すきをする 種子消毒の徹底 増水等の実施 更新種子の利用	田植(細苗)3本~4本 栽植密度30cm×18cm (50~60株/坪) 害虫、葉いもち予防剤の育苗箱施用	除草剤散布(一発処理剤)	後期除草剤散布(出穂35日前まで) 中干しの徹底(袋数18本になり次第)	第一回穂肥 ※コシヒカリ カメムシ対策 畦畔雑草の刈取 第一回穂肥 ※あきたこまち ※キヌヒカリ	穂いもち、紋枯病防除 ※粒剤の場合	第一回穂肥 第一回穂肥の約10日後	穂いもち、紋枯病防除 カメムシ防除 ※カメムシは出穂期と穂期との回防除	早期落水をしなさい 落水は収穫前7日以降とし、カメムシ防除	収穫期前後で刈取 水分で26%前後で刈取 収穫量が3~4割残っている程度	生わらの早期すき込み	土改材散布と秋起し

1. 育苗の要点(稚苗) “健苗が豊作の第一歩”

種子更新	品質向上のため毎年全量種子更新をする。
塩水選	水20ℓに、食塩4kg(うち、2kg(もち)で行い、よく水洗いをする。
種子消毒	＜浸漬処理＞ テクリドC 100cc(ばか菌苗、もみ枯細菌病)混用 水20ℓに、スミチオン乳剤 20cc(イネシロガレシチュウ)混用 10℃以上の水温で24時間、上記混用液で浸漬する。(特に風乾する必要はない) ＜温湯殺菌処理＞ 農業を使用せず、温湯により処理する方法です。尚、処理方法につきましては、最寄りの支店までご相談ください。※浸漬処理や温湯殺菌処理の他に塗布処理でも可能です。
種籾の浸種	10℃~15℃の水...10日~12日 低温時の浸種は十分にします。※1~2回水かえをする。
種籾の催芽	育苗器で、30~32℃でハト胸程度(1日程度)。
床土準備	くみあい粒状育苗培土(クリーン2号) 10a当り4袋 1箱当り3~4kg
播種	ハト胸催芽籾1箱当り160g(1.6合)~180g(1.8合)以内とし、うす播きをする。
病害防除	苗立枯病:ナエファインフロアブル:2,000倍液又はタチガレエースM液剤:500倍液 1箱当り500ml(播種時)。 かび:ダコレート水和剤・500倍液、1箱当り50g(播種時~播種14日後まで)。 ムレ苗防止:アジワン粒剤、1箱当り50g(緑化始期)。
温度管理	出芽期 (2~3日) 30~32℃で発芽をそろえる。 緑化期 (3日) 昼温20~25℃、夜温15~20℃で苗の姿勢を決める。 硬化期 (15日) 昼温15~20℃、夜温10~15℃十分に換気し、葉のたれない苗をつくる。かん水は午前中に行い、夕方に表面が乾く程度とする。

※種子消毒や浸漬等の廃液は、河川や排水等に流さず適正に処理して下さい。

年間防除で被害軽減! ジャンボタニシ対策こよみ

活動期間	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ジャンボタニシ活動期間	冬眠(気温14℃以下)											
稲を食べる期間(田植後2~3週間)	地域に広まってしまったジャンボタニシを完全に駆除することはほぼ不可能です。被害を最小限に抑えるために、防除しましょう!											
効果的な対策・管理方法	稲が生育している時には! 大切な3つのポイント						冬季には! 耕うんして貝を潰す!					
①貝を水田に入れない	水口、水原に金網(1~2cmメッシュ)またはネット(9mm)を張る						①トラクターの走行速度を遅くする					
②貝を増やさない	貝・ピンク色の卵塊を潰して、駆除する						②回転数をできるだけ上げる					
③貝に稲を食べさせない	4cm以下の浅水管理を行う						③深さは浅くても良い(5cm)					

2. 除草剤散布 “水管理で除草効果は決まる”

薬剤	モゲトン粒剤	クサエボ11粒剤	ベッカク1粒剤	エンペラー1粒剤	トップガンR1粒剤	スラッシュ粒剤	エンペラー豆つぶ250	クサエボフロアブル	ブライオリティフロアブル	クサエボジャンボ	ベッカクジャンボ	エンペラージャンボ	トップガンRジャンボ	銀河ジャンボ	エリジャン乳剤	サキドリE	マーシェット11粒剤	ウィンドコアジャンボSD	レプラスキジャンボ
播種専用剤	3kg	1kg	1kg	1kg	1kg	3kg	250g	500ml	500ml	400g	250g	250g	250g	400g	300ml	500ml	1kg	200g	300g
一発処理除草剤	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期
ジャンボ剤	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期	最速期

※上表の印は登録剤の登録内容を記載しており、ご使用にあたっては、最速期印の最速期でのご使用をお奨めします。

項目	農薬名	適用雑草名	使用時期	10a当り使用量	使用方法	本剤の使用回数
ヒレタゴ	ヒエタリソ 豆つぶ250	ノビエ	移後15日~ノビエ4葉期(但し、収穫45日前まで)	250g	—	1回
	クサエボ E/W	ノビエ	移後20日~ノビエ6葉期(但し、収穫30日前まで)	100ml	25~100L 湛水散布又は湛水散布	2回以内
雑草防除	プラシコート	一年生雑草及び多年生雑草	移後10日~収穫前(10~20日)湛水散布	300~500ml	50~100L 雑草茎葉散布	3回以内
	クサエボ E/W	ヒエ、ワカバ	移後10日~収穫前(10~20日)湛水散布	1,000ml	50L 雑草茎葉散布	1回

3. 病虫害防除 “出てあわてるよりも 先ず先制の予防対策”

区分	病虫害名	農薬名	施用量(10a当り)	本剤の使用回数	使用時期	備考
箱施	いもち病、白葉枯病、ウツカ類、イネミズ、イネドロ、ヨコバイ	ツインターボ箱粒剤08	50g/1箱	1回	播種前 播種時(覆土前)~移穂当日	*育苗箱の床土又は覆土に均一に混和する。
		Csオリゼリディア箱粒剤	50g/1箱	1回	移穂3日前~移穂当日	*育苗箱の苗の上から均一に散布する。 *茎葉の薬剤は払い落とすこと。
	いもち病、紋枯病、イネミズ、イネドロ	CsオリゼリディアEV箱粒剤	50g/1箱	1回	移穂7日前~移穂当日	*いもち病常発地帯は必ず施用してください。
		ブーン粒剤	50g/1箱	1回	移穂当日 は播種時(覆土前)	*育苗箱の上から均一に散布する
本田施用	ウツカ類、イナゴ類、イネミズ、イネドロ、ヨコバイ	アレス箱粒剤	50g/1箱	1回	播種前 播種時(覆土前)~移穂当日	*育苗箱の床土又は覆土に均一に混和する。
		サンプラス粒剤 [予防効果]	3~4kg	1回	出穂5日前まで 但し、収穫30日前まで	*特に予防に心がける。
	いもち病	コラトップ豆つぶ [予防効果]	250g	2回以内	初発10日前~初発時 穂いもち: 出穂30日前~5日前まで	*散布後4~5日間は湛水状態を保つ。
		オリブライ豆つぶ [予防・治療効果]	250g	1回	出穂10日前まで 但し、収穫45日前まで	*散布後4~5日間は湛水状態を保つ。
剤	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウツカ類、ヨコバイ、フタオビコヤガ	ガッツスター粒剤 [予防効果]	3kg	1回	出穂5日前まで 但し、収穫45日前まで	*散布後4~5日間は湛水状態を保つ。 *カメムシ類の散布時期の目安
		フジワラップ粒剤 [予防効果]	4kg	2回以内	収穫30日前まで	①イネクログカメムシ: 6月上旬 ②斑点米カメムシ: 出穂10日~5日前(穂ばらみ期)又は出穂5日~10日後(穂揃期~傾穂期)、多発時は出穂後の2回散布
	いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウツカ類	ワイドパンチ豆つぶ [予防・治療効果]	250g	1回	収穫35日前まで	
		クラップ粒剤	3kg	2回以内	収穫14日前まで	
カメムシ類、ウツカ類、ヨコバイ	スターフル豆つぶ	250g	3回以内	収穫7日前まで		

※農薬の登録内容は随時変更されることがありますので、下記のアドレスのホームページで検索することが出来ます。農薬登録情報 http://www.jppn.ne.jp/nouyaku/

乾燥・調製の要点

- 過乾燥の防止。仕上げ水分は14.5~15%を目標。(当地域の早期栽培は、乾燥終了後の余熱乾燥もあり仕上げ水分を高めに設定)
- 高温で急激な乾燥は避ける。平均の毎時乾燥率は0.8%を超えない。(割割れ米の発生と食味劣化の防止)
- 自動水分計の精度は毎年始めにチェック。乾燥中もこまめに測定。
- 水分18%まで乾燥したら、数時間送風を止めムラを直し、その後乾燥再開。
- 調製は、粒温が常温に戻ってから。(粒温が高いと粒割りの肌ズレが多発)
- コムロール間隔は0.8~1.2mmが基準。脱ぶ率は80~85%を目標。
- ライスグレーダーの総目目は1.85mm(L型)以上を使用。(整粒歩合80%以上とする)

ヒレタゴボウ対策

管内の水田にて「ヒレタゴボウ」という雑草が問題となっています。ヒレタゴボウは畑地雑草のため、湛水している状態ではあまり発生しません。主に田面露出地点や、中干し時に発生が見られます。ヒレタゴボウは収穫期まで長期間にわたり発生が続きませんが、中干し時は初中期一発除草剤の効果のリセットされるため、十分に防除するには初中期一発除草剤と中後期除草剤との体系処理が必要となります。詳しくは、予約申込書13ページの「ヒレタゴボウ対策について」をご確認ください。

白未熟粒軽減対策

- 登熟期の窒素栄養を高める
◎登熟期の窒素栄養が下がると白未熟粒が発生しやすくなります。
高晩年は穂肥を多めに施用することが効果的です。
- 登熟期の高温対策
◎白未熟粒軽減対策として「水管理」が重要です。穂揃い期までは湛水管理、登熟期間中は間断かん水を基本としながらも、できるだけ新鮮な水の供給を随時行うよう心がけましょう。